

東南アジアにおける近代

白石 隆

(コーネル大学准教授)

二つの地図

「東南アジアにおける近代」について考える時まず思いつくことは、米国における東南アジア近代史の標準的教科書『東南アジアを求めて』(In Search of Southeast Asia)掲載の二つの地図である。¹⁾ この地図は、現在我々が東南アジアを考える時に想起する地図であり、かつてたとえば18世紀末に東南アジアの人々がその世界を表現するのに使ったような地図ではない。しかし、私がとりあえず考えているのはもっと単純なことである。

まずは地図を見ていただきたい。第一は18世紀末の東南アジアの地図(fig.1), 第二は19世紀末の地図である(fig.2)。二つの地図の違いは明らかだろう。最初の地図では国家は中心によって定義される。ちょうどランプの光が光源から離れるにつれて弱くなるように、国家の力も中心から周辺に行くにしたがい次第に弱くなる、そうしたもとして国家は観念され存在した。シャムでムアン(muang), ジャワ・マレー世界でヌガラ(negara)と呼ばれたのはそういった国家であった。つまり、東南アジアには本来、主権国家の観念はなく、王国は宗主権の原理に基づき、こうした国家の連合体として存在した。しかし、そうした事情は19世紀末までにはまるで変わってしまう。第二の地図に示されるのはそうした新しい国家の有り様である。そこでは国家は地図上に截然と引かれた国境線によって定義される。そして国境線が主権国家間の条約により決められたものであってみれば、そこでの国家とは主権国家である(植民地において条約締結の主体となったのは主権国家たる本国の政府である)。

とすればこの移行の過程で東南アジアに大きな変化が起こったことも十分うなづけよう。近代国家の基礎が据えられ、国境線によって仕切られた領域内においてそうした国家の統治がぐまなく浸透し始めるのはこの過程で起こったことである。また19世紀後半に始まる電信・電話網の創設、鉄道の敷設、道路の建設などもまずは国境の内部で始まった。それは文化の領域についても言える。たとえば、マレー語の年代記は19世紀に至るも、広くマレー世界各地で筆写され、詠まれ、聞かれるものだった。現にアチェ(北スマトラ)の「聖戦の詩」の写本はスルーとマカッサルで見つっている。つまり、文学はたとえ記されたものでも、語りの文学の伝統に根差していた。しかし、19世紀、そうした文学の世界にも、国境線で仕切られた国家の論理が容赦なく浸透してくる。それはまずヨーロッパ人官僚・学者の「学問」の対象となった。テキストは、写され、詠まれ、楽しめるものではなく、編集され、印刷

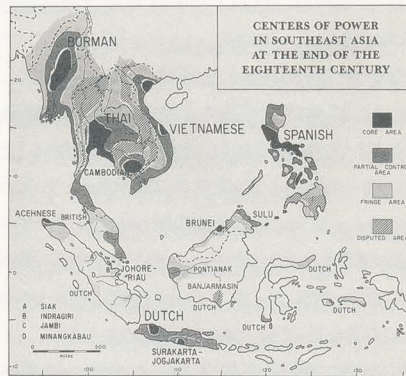


fig.1. 18世紀末の東南アジア
Centers of power in Southeast Asia at the end of the eighteenth century, from the book *In Search of Southeast Asia* (Honolulu: University of Hawaii Press, 1987).

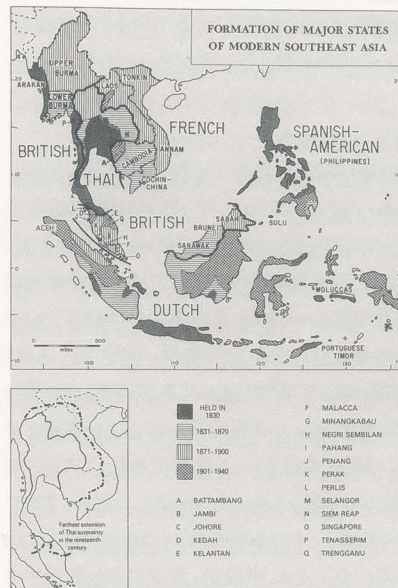


fig.2. 19世紀末・20世紀初めの東南アジア
Formation of major states of modern Southeast Asia from the book *In Search of Southeast Asia* (Honolulu: University of Hawaii Press, 1987).

され、書齋で標本のように研究されるものとなった。そしてそこから、たとえばかつてマラッカ海峡、ジャワ海を場として成立したマレー世界について言えば、半島部の英領マラヤではイギリス人による英語のマレー研究が、国境線を越えた海峡の向こう側では、オランダ人によるオランダ語のマレー研究が成立することになった。

誤解のないよう言っておけば、私はここでそうした変化の是非を問題にしようというのではない。私の言いたいことは、東南アジアはそうした変化のなかで「近代」を迎えたということである。そうした変化がなければ、20世紀初めの頃までに確定した国境を継承して今日、我々の知るような国民国家がこの地域に成立することもなかったし、また今我々の知るような東南アジアの歴史、文学の伝統もなかったであろう。フランス人東洋学者がかつてアンコールの「遺跡」を修復し研究しなければ、それがやがて20世紀後半になってシアヌーク、ポル・ポトにとって「クメール国民」のかつての「栄光」を示すことになるなど、どうして起こりえたであろう。

したがって、東南アジアにおける近代は、第一の地図の世界から第二の地図の世界への移行とともに始まると言ってよいだろう。とすれば、その意味を考えるために、そこに第二の地図に表現されるような世界が成立した時、東南アジアの人々がそれをどう受け止めたか、そこで人々が彼らの生きる現実と向かい合うその構えにどのような変化が起こったのかを考える必要があるだろう。

アジアの地域秩序

東南アジアの近代を考える上で『東南アジアを求めて』にはもう一つ重要なヒントがある。それは「東南アジア」という地理的観念である。『東南アジアを求めて』というタイトルがいみじくも示すように、「東南アジア」は歴史的に構成された地域ではなく、本来的に空虚で不安定な概念である。それは、この言葉が1940年代になって初めて広く使用されるようになり、1950年代、中国「封じ込め」政策を基本とした米国のアジア戦略において正統性をもつに至ったことを考えれば明らかだろう。つまり、簡単に言えば、「東南アジア」は中国が閉じている時に意味をもった言葉である。「東南アジア」は第二次大戦前には存在しなかったし、またこの10年、アジアにおける地域主義の抬頭とともにこの概念はもうかつてほどには意味をもたなくなっている。それが最近、東アジアと東南アジア、その両方を含んだ広い意味での「東アジア」概念がますます使われるようになってきている理由である。問題はこの「東アジア」の歴史をどう考えるかである。

これまでアジアの歴史を論じる際、「西欧の衝撃と東洋の応戦」という問題の立て方がすでに示すように、しばしば、西欧の到来までアジアに国際的秩序は存在しなかったと考えられた。しかし、実際には西欧到来のはるか以前からこの地域には国際的秩序が存在した。そうしたアジアの歴史を考えるのに、浜下武志は、アジ

アを陸の世界としてではなく、一連の海からなる海域世界としてとらえることを提唱している。²⁾ つまり、彼によれば、アジアの海域世界は、歴史的には、中国が朝貢貿易システムによって中華秩序を外縁的に拡大していった場であり、その要諦は中国がその市場の魅力に朝貢貿易によって政治的・文化的権威に転化することにあった。明清時代にそれができたのは、中国が周辺諸国に比較して圧倒的に豊かな帝国であり、またアジアの海域において華僑商人のネットワークが抜き難い力をもっていたからであった。先に私は東南アジアにおいて歴史的に国家編成の原理となっていたのは宗主権の原理であったと述べたが、実はそうした宗主権的秩序の頂点にあったのが、中国、より正確には「中華」=世界の中心であった。そしてこの中華によって秩序づけられた世界の現実と観念は、ちょうど東南アジアにおけるムアン、ヌガラ（注）の権力と権威が中心から遠ざかるにしたがって弱くなっていったように、やはり「中華」の光源から遠ざかるにしたがって薄らいでいった。

しかし、ここで重要なことは、こうしたアジア海域世界の伝統的国際秩序が19世紀に崩壊し、イギリスの覇権の下、主権原理に基づく「イギリスの平和」として再編されたことである。19世紀初め、イギリスのジャワ占領前夜にラッフルズがすでに記したように、東南アジア、東アジアにおけるイギリスの帝國的秩序は、アジアの海の支配の上に構想され、その制度的基礎となったのがペナン、シンガポール、ホンコン、上海をつなぐ条約港システムであった。また東南アジアにおいて華僑の商業的ネットワークをイギリスの利益に沿って再編し、さらに中国市場から富を吸い上げる手段となったのはアヘンであった。こうして、東南アジアにおいてちょうど第一の地図から第二の地図への移行が行なわれた時期に、東アジアの地域秩序においても、かつて中華秩序の下にあったアジアの海域世界がイギリスの覇権の下に再編され、主権原理に基づく西欧的国際秩序が成立する。

アジアの「近代化」

こうした地域秩序の変容は東アジア世界にシステミックな危機をもたらした。明治日本はそうした危機に対応して「富国強兵」により世界の「文明国」の途を歩むことになった。と同時に、そうした危機は、日本が自らを中華秩序から切り離して中国と対等となり、ついでに中国に代わって東アジアに「中華」を唱える好機でもあった。つまり、日本の「近代化」は19世紀、東アジアに並存するに至った二つの国際秩序、伝統的な中華秩序とイギリス覇権下の西欧的

国際秩序、その両者に対応するものであった。

しかし、こうした東アジア世界の危機がアジアの海域の西欧的国際秩序への編入によってたらされたことからすれば、アジアにおいて日本だけが「近代化」したと考えるのは日本人の思い込みである。日本と東南アジアの違いは「近代化」の有り様の違いである。日本は「富国強兵」の名の下、産業化の推進、国民教育の推進、近代的国家機構の編成、陸海軍の建設等を行なった。ちょうどこれと同じ頃、東南アジアでは、国により違うものの、基本的には、植民地資本主義と植民地国家を中心として植民地的近代化が始まった。

蘭領東インド、つまり現在のインドネシアでは、この過程は遅くとも1870年代に始まった。ジャワの糖業と鉄道建設、東スマトラ、テリのタバコ・プランテーションは1870年代から1890年代にかけて大いに発展した。オランダ東インド政府がマレー語文法、綴りの公定により官語マレー語の標準化にのりだすのは1890年代のことだった。そして20世紀初めには、やがてインドネシア共和国がその領域として継承することになる「サバンからメラウケまでの」版図が確定し、その領域内で近代的国家機構の整備が行なわれるようになる。たとえば、1910年代には近代の警察機構が整備され、1919年には特別高等警察が設立された。また「進歩」「原住民の福祉向上」の名の下、オランダ語、マレー語による「原住民」教育も次第に拡充された。こうして1910年代ともなれば、当時東インドに渡った日本人に日本以上に近代的と映ったような世界が東インドに現われた。

しかし、オランダ東インド国家は植民地国家であり、国民国家ではない。したがって、その産業化は植民地資本主義による一次産品輸出経済の形成を意味し、工業化を意味したのではなかった。また警察の近代化をはじめとする国家機構の整備・拡充も植民地統治のためであった。それどころか、植民地において国民の概念はありえない。それには20世紀初め、「倫理政策」時代の教育の拡充を見ればよい。教育は植民地統治、植民地経済に有用な人材の育成を目的としたもので国民教育をめざしたものではなかった。したがって、教育制度は、オランダ人子弟を対象にオランダ本国の教育制度と連結したオランダ語による初等・中等教育、「原住民」子弟を対象としたマレー語の初等教育、オランダ語の初等・中等教育、「東洋外国人」、つまり華人を対象にしたマレー語の初等・中等教育の4本立てとなった。そしてこうした教育によって作られたのは、国民社会ではなく、人種原理に基づく複合社

会であった。

インドネシアにおける植民地的近代化がどのように典型的な形をとったのは、オランダ東インド国家が、日本と同じように、アジアの海域におけるイギリスの覇権を前提としつつ、そのなかで蘭領東インドの領域を地域秩序から「囲い込む」ことに成功したからであった。しかし、そうした事情は、フィリピン、シヤムでは少し違っている。フィリピンは19世紀にはスペインの植民地支配下にあった。しかし、スペイン資本主義はきわめて弱体であり、またマニラにあったスペイン植民地国家の力も地方にはそれほど浸透しなかった。フィリピンの植民地国家は、したがって、オランダ東インド国家がその領域を囲い込んだようには、植民地を地域秩序から囲い込むことができなかった。しかし、そうはいっても、植民地の経済開発を進めなければ、フィリピンは植民地として経済的になんのメリットもない。こうして植民地政府は、19世紀半ば以降、マニラ、セブ、イロイロなどを開港し、フィリピンはイギリスの覇権下のアジア海域世界に経済的に編入され、各地の地方経済がシンガポール、ホンコンと直接結びついて「産業化」していった。

したがって、19世紀フィリピンの経済発展において重要な役割を果たしたのは中国系メスティーゾであり、華僑の商業的ネットワークであった。こうしてフィリピンでは、蘭領東インドにおいて「原住民」エリートが近代の官僚国家の形成とともに次第に貴族から官僚へと変貌していったちょうどその時期に、中国系メスティーゾ、「原住民」名望家が次第に大地主、プランテーション経営者に成長していった。そしてこうしたエリートが求めた教育は、もちろん「原住民」官吏になるための教育ではなく、紳士たるにふさわしいスペイン語での高等教育であった。西欧教育を受けたフィリピン人エリート、イラストラードはこうした変化のなかで生まれたのであり、20世紀、フィリピンが米国の植民地支配下に入ると、彼らは米国の導入した議会制度によって政治的にも力をもつことになる。

さてそれではシヤムはどうか。シヤムは、形式的にはその政治的独立を維持し、その一方、経済的には、英領マラヤが米の輸出先となってイギリス覇権下のアジア海域世界に編入された。しかし、シヤムの「近代化」においてより重要なことは、ラーマ4世、5世の時代、その「近代化」のモデルとなったのが英領マラヤだったことである。こうして19世紀後半のタイでは、英領マラヤと同様、華僑の行なうアヘン請負その他の徴税請負が国家の財政的基盤をなし、バンコクより派遣された理事官が次第に地方行政を掌握し、また官吏養成を主要目的として洋式教育制度が整備されて

いった。そしてこれが19世紀後半、20世紀初めのシャムの「近代化」が時に「国内の植民地化」と言われる理由である。

東南アジアにおける近代

このように「近代化」の有り様は日本と東南アジアでは大きく違っていた。日本の近代化が帝国主義的近代化であったとすれば、東南アジアは植民地的近代化によって近代を迎えた。とすれば、東南アジアにおいて、近代が、日本とは違う相貌をもって現われ、人々がこれを日本とは違う形で受け止めたとしてもごく自然であろう。では東南アジアにおいて人々は近代をどう受け止めたのか。ここでおそらく最も重要なことはナショナリズムの到来であろう。ベネディクト・アンダーソンが『想像の共同体』において述べるように、ナショナリズムとは、国境線によって截然と定義されたある領域内の人々が自分たちを一つの国民と想像し、そうした国民の自治機関として自らの国民国家を実現しようとする運動である。³⁾ 日本ではそうした国民は近代国家の一要件として上から創られた。しかし、植民地的近代化を経験した東南アジアでは、ナショナリズムは主として、下からのナショナリズムとして、つまり植民地支配から自らを解放し自分たちの国民国家を作ろうという運動として現われた。

東南アジアになぜ19世紀末、20世紀初めになってナショナリズムが到来したかについては、すでにアンダーソンが周到に論じているので、ここでは洋式教育の普及、中央集権的近代国家機構の建設がきわめて重要な要因であったということを描きおきにとどめる。むしろここで私の述べたいことは、東南アジアの近代において、そうしたナショナリズムの到来がいかに重要であったかということである。それを見るには、この地域で近代的な政治、つまり20世紀末の現在に生きる我々がただちにこれは政治であると了解できるような政治がいつ始まったかを考えればよい。たとえば、インドネシアにおいてマレー語の新聞・雑誌が発行され、植民地の住民がそこで政府に対し要望、批判、異議申し立てを行なうようになるのは19世紀末、20世紀初めのことである。集会、ボイコット、宣伝ビラの配布が行なわれるようになったのは1910年前後、政党の結成、労働組合・農民組合の組織、ストライキ、デモの行なわれるようになるのは1910年代後半である。さらに近代的な政治の言説に不可欠の概念、人民(rakyat)、国民(bangsa)、自由(merdeka)、革命(revolusi)、資本主義(kapitalisme)、社会主義(sosialisme)、共産主義(komunisme)のようなイデオロ

もちょうどこの頃に作られ、その結果、オランダ東インド国家の言語、官語マレー語とならんで、インドネシア・ナショナリズムの政治的言語、インドネシア語が成立する。

フィリピン・ナショナリズムの成立はインドネシアよりも一世代早く、19世紀末、ホセ・リサールに代表されるイラストラドの社会的登場とともに起こり、またタイ・ナショナリズムの成立はインドネシアより一世代遅く、1932年の立憲革命でチャクリ絶対王制を倒したブリタイ、ピブンの世代とともに始まる。しかし、東南アジアにおいて(そして実は、世界のどこでも)ナショナリズムの到来が重要なのは、それが政治の領域を越えて、広く社会的・文化的に革命的な意味をもったからである。それを理解するにはいくつかの例を挙げればよいだろう。

第一は宗教的救済の意味の変化である。たとえば、ビルマのウ・オッタマは、イギリス植民地支配下において仏教徒が涅槃に至る唯一の途はビルマ独立を達成し、仏教社会主義を実現することであると説いた。またインドネシアのイスラーム改革派指導者ハジ・ミスバハハは、日々、サタンの誘惑と戦い、自らの信仰の証とすることが真のイスラーム教徒たる途であり、今日、サタンの誘惑は資本主義の精神として具現している。したがって、資本主義と戦い共産主義社会の建設をめざすことが真のイスラーム教徒の任務であるとイスラーム共産主義を唱えた。こうした宗教の政治化は、社会的には、植民地国家が世俗国家としてかつての伝統的王国のように宗教を護持せず、また洋式教育の普及が伝統的な宗教教育を脅かしたためであった。しかしそれにしてもこれが「国民」「革命」「独立」「社会主義」「共産主義」といった概念を抜きにして成立しようもなかったことは明らかだろう。そしてこれによって殉教は殉国に転化していった。

第二は、新しい歴史的想像力の成立である。人々が自分たちを一つの国民と想像するようになれば、過去は、そうした国民の過去として新しい歴史的意味をもつようになる。そしてこれに、循環する時間(たとえばジャワにおける「光の時代」と「闇の時代」)、神の遍在により意味づけられた時間に代わって、新しい「空虚で均質な」一方向に流れる時間の観念が付け加われば、歴史は過去から未来に向けての国民の自己実現の歴史として想像されるほかない。19世紀末、アチェ戦争の女傑チュット・ニャ・ティンが、19世紀前半、ジャワの「征服」と唱えたディボヌゴロとともにインドネシア国民の英雄となる、かつてマレー世界に覇を唱えたスリウィジャヤ王国がジャワのマタラム王国とともにインドネシア国民の伝統と

なる、スコタイ建国の王ラーマカムヘーンがタイ国民国家の始祖となる、シャムの歴代王朝が仏教とともにタイ国民の伝統となる、これはそうした新しい歴史的想像力の産物である。そしていままではそうした国民的想像力の上に、国民国家の正統性が基礎づけられている。

第三は、新しい空間的・地理的想像力の成立である。初めに二つの地図を論じた時、私は、18世紀末、東南アジアの人々は彼らの生きる世界をこのような地図として想像したわけではないと指摘した。それでは当時、人々がその世界をどのように想像していたのかということとはここでは触れない。ただここで指摘したいことは、地図製作法の進歩によって、19世紀末までには現在我々の知るような地図が作成され、これが役所、学校の教室に掛けられ、また学校の地理の教科書に印刷されるようになったことである。こうして20世紀ともなれば、ちょうど日本人が日本といえば地図上にそこだけ赤く示された「日本列島」を思い浮かべるように、東南アジアの人々も国境線で截然と区切られロゴとなったそれぞれの国土を想像するようになった。

国民とは集団的記憶に基づくと同じくらい集団的忘却に基づくとはよく言われることである。そして現在では、我々が国民的想像力を手に入れることによって何を失ったのか、それを明らかにすることで近代が批判され、近代を支えた歴史の進歩への信仰も、もはやかつてのような魅力をもたなくなっている。しかし、19世紀末、20世紀初め、植民地的近代化のなかで東南アジアに近代の訪れた時、人々は「進歩」に大きな希望をもち、スカルノが独立はインドネシア国民の輝かしい未来に架かる「黄金の橋」であると語ったように、ナショナリズムの到来は、人々が国民として目覚め、進歩への途を歩み始める証しと受け止められた。そしてそれは、近代が、たとえやがて新しい闇をもたらすにせよ、その初期には、抑圧と不正、不条理と搾取からの人間の解放をもたらすものと受け止められたからだろう。

1910年代、オランダ植民地支配下のジャワに生きた「原住民」ジャーナリスト、マス・マルコは、当時、植民地政府の「原住民」政策に大きな影響力をもった原住民顧問官リンケスを批判してこう書いている。

原住民問題顧問官リンケス博士殿のような人物は、政府より原住民の状況について諮問されているのであるから、当然、我々原住民の境遇について誰よりもよく理解しているであ

らう。

さてそれではマルコはどうか。彼はどのような人物か。マルコは一介の庶民であり、学校の教室に入ったことなど絶えてなく、その見識も狭い。しかしそれでも、神の恩寵により、多くの人々と同様、二つの耳、二つの手、一つの頭、一つの口、等々を与えられている。マルコの二つの目は大学卒業者の二つの目とならぬ違わない。したがって、マルコが何か白いものを見れば、それは教育を受けた人の目にも白と見えるだろう、等々。

東南アジアの人々がこういう文章を書くようになったのは近代になってからだ。あるいはかれらがこういう文章を書くようになった時に近代が始まったといったほうがよいかも知れない。そして自分の生きる世界に対するこうした新しい構えのなかから、新しい歴史、政治、文学が生まれてきたのであり、それを生み出したのは、新しい殉教＝殉国の精神、歴史的・地理的・国民的想像力だった。

註

- 1) J. Steinberg, et. al., *In Search of Southeast Asia* (Honolulu: University of Hawaii Press, 1987).
- 2) たとえば、『近代中国の国際的契機 朝貢貿易システムと近代アジア』(東京大学出版会, 1990年), 「序 地域研究とアジア」溝口雄三, 浜下武志, 平石直昭, 宮嶋博史編, アジアから考える(2)『地域システム』(東京大学出版会, 1993年)所収, “The Intra-Regional System in East Asia in Modern Times.” in Peter J. Katzenstein and Shiraishi Takashi, eds., *Between Worlds: Japan in Asia* (Ithaca: Cornell University Press, Forthcoming) 参照。
- 3) Benedict Anderson, *Imagined Communities: Reflections on the Origin and Spread of Nationalism* (London: Verso, Revised Edition, 1991). ベネディクト・アンダーソン, 白石隆・白石さや訳, 『創造の共同体』(リポポート, 1987)参照。

The Modern in Southeast Asia

Shiraishi Takashi

Associate Professor for History and Asian Studies, Cornell University

Two Contrasting Maps

What immediately comes to my mind when I consider the modern world in Southeast Asia are two maps published in *In Search of Southeast Asia*, the standard textbook in the United States on modern Southeast Asian history.¹ The maps depict what we envision when we think of Southeast Asia today. Although they are not the kind of maps that Southeast Asians in the past, for instance, at the end of the 18th century, used to represent their world, my concern at present is more elementary.

The first map depicts Southeast Asia at the end of the 18th century (fig. 1, p. 171); the second one, at the end of the 19th century (fig. 2, p. 171). The difference between the two maps is readily apparent. In the first map, the state is defined in terms of the center. Just as light fades as it radiates outward from the source of light, state power gradually weakens as it spreads outward from the center to the periphery. The state was perceived that way in both theory and practice; the political entities called *muang* in Siam and *negara* in the Java-Malay world were two examples of this type of state. In other words, the notion of the sovereign state did not originally exist in Southeast Asia. Dynastic states based on the suzerainty principle consisted of a collection of states called *muang*, *negara*, and soon.

By the end of the 19th century, however, the situation had radically changed. The second map shows the emergence of a new type of state. The states here are defined in terms of boundaries clearly demarcated on a map. Since the borders were established as a result of treaties between sovereign states, the states on the map are sovereign entities. (The chief party concluding a treaty in a colony was the government of the imperial power, a sovereign state.)

From this, one can say that major changes occurred in Southeast Asia while this shift was taking place. What happened during this process was that the foundations of the modern state were laid, and the rule of the state began to spread throughout the territory defined by national borders. Moreover, the creation of telephone and telegraph networks and the construction of railways and roads, which began in the second half of the 19th century, were initially launched inside of national boundaries.

A similar phenomenon also occurred in the realm of culture. For instance, *sejarah*, or annals, written in Malay were widely copied, read, and enjoyed around the Malay world down to the 19th century. Indeed, manuscript copies of *Hikayat Perang Sabil* (Story of the Holy War) from Aceh in Northern Sumatra have been found as far away as Sulu and Makassar. In short, literature, even when copied, was rooted in the oral tradition. In the 19th century, however, the principle of the state defined by national borders inevitably

penetrated even the world of literature. Literature became the subject of study by European scholar-bureaucrats. Texts were not copied, read, and enjoyed, but rather collected, printed, and studied in a library, exactly like scientific specimens. In the case of the Malay world formerly established in the region surrounding the Straits of Malacca and the Java Sea, this process led to the creation of English-language Malay studies in the British colony on the Malay peninsula, and to Dutch-language Malay studies in the territory held by the Netherlands on the other side of the Straits.

I am not questioning here whether such changes were right or wrong. What I am trying to say is that Southeast Asia entered the modern era while those changes were taking place. Had they not occurred, the nation-states that we know today, which inherited boundaries defined by the beginning of the 20th century, would not have been established in Southeast Asia. The historical and literary traditions of that region, as we know them, would not have existed either. Had French Orientalists not restored and studied the monuments at Angkor, how could the site have been held up as a symbol of the Khmer nation's former glory by Prince Norodom Sihanouk and Pol Pot in the latter half of the 20th century?

Accordingly, one may conclude that the modern era in Southeast Asia began with the shift from the world expressed in the first map to the world expressed in the second map. To understand its significance, we must consider Southeast Asians' attitude toward the establishment of the world represented in the second map, and examine the changes that occurred in the posture that they adopted regarding the reality in which they lived.

Regional Order in Asia

In Search of Southeast Asia contains another important hint regarding Southeast Asia in modern times, and that is the geographical notion of "Southeast Asia." As the title of the book aptly suggests, "Southeast Asia" is inherently an empty, unstable concept, not a region constituted historically. This should be perfectly clear from the fact that the term first became widely used in the 1940s and acquired legitimacy in the 1950s as part of the United States's Asia policy, which was founded upon the containment of China. To put it simply, "Southeast Asia" is a term that had meaning when China was closed to the outside world. The term did not exist prior to World War II; with the rise of Asian regionalism since the 1980s, the concept no longer has as much meaning as it did in the past. That is why the term "East Asia," which, broadly speaking, includes Northeast and Southeast Asia, is recently gaining currency. The question is, How should the history of East Asia be understood?

As the formulation "Western Impact and the Asian

response" shows, the notion that an international order did not exist in Asia until the coming of the West has often informed past discussions of Asian history. However, an international order had, in fact, existed in this region since long before the coming of the West. When examining Asian history from this perspective, as Hamashita Takeshi reminds us, one should consider Asia as a maritime world consisting of a series of seas, rather than as a world of landmasses.² He argues that maritime Asia, historically speaking, was an arena where China extended its Sino-centric world order by means of the tributary system, translating its appeal as a market into its political and cultural hegemony. China under the Ming and Ch'ing dynasties was able to maintain its world order in Asia because of its position as an empire possessing far greater wealth than the countries on its periphery, and because of the enormous power the network of overseas Chinese merchants had in the maritime regions of Asia. As I noted earlier, the Southeast Asian state was historically founded on the principle of suzerainty, but, in fact, what actually stood at the pinnacle of this suzerainty-based "international" order was China, or more precisely, Chunghua, the center of the civilization. The reality and concept of the Sino-centric world order dimmed as the distance from the source of China's light increased, just as the power and authority of the *muang* and *negara* declined as the distance from the center increased.

What is important here, is the fact that this traditional order in maritime Asia collapsed in the 19th century, and that it was restructured under British hegemony as the *Pax Britannica*, based on the principle of sovereignty. As already noted by Sir Thomas Stamford Raffles on the eve of Britain's occupation of Java in the early 19th century, the British imperial order in Southeast and East Asia was percolated upon colonization of Asia's seas. The foundations of this order were provided by the system of treaty ports that linked Penang, Singapore, Hong Kong, and Shanghai. The overseas Chinese trading network in Southeast Asia was also reorganized to Britain's advantage. Opium was turned into a means of siphoning wealth from the Chinese market. In this way, British hegemony replaced Chinese hegemony in maritime Asia, and the Westfalian international order based on the principle of sovereignty was introduced in Asia. These developments occurred during the very same period when the shift from the first map to the second map took place in Southeast Asia.

Asia's "Modernization"

This transformation of the regional order caused a systemic crisis in the East Asian world. Japan in the Meiji era (1868-1912) responded to that crisis by pursuing the path of a "civilized nation" under a policy called *fukoku kyohei* ("rich nation, strong army"). At the same time, the crisis provided

an excellent opportunity for Japan to divorce itself from the Sino-centric world order and become China's equal, and eventually even to advocate replacing China as the center of the East Asia world. In other words, Japan's modernization was in response to two international systems that had come to co-exist in East Asia in the 19th century: the traditional order centering on China and the Westfalian international order under British hegemony.

Since this crisis in the East Asian world was caused by maritime Asia's integration into the Westfalian international order, the belief that Japan was the only Asian country to modernize is a misconception on the part of the Japanese. The difference between Japan and Southeast Asia lay in the form that modernization took. Under the slogan, "rich nation, strong army," Japan promoted industrialization and a national educational system, created modern state institutions, and established an army and navy. During that very same period, colonial modernization driven by colonial capitalism and a colonial state began in Southeast Asia, although the situation varied from country to country.

In the Dutch East Indies (in other words, what is now Indonesia), this process began, at the latest, in the 1870s. The sugar industry and railway construction in Java, and the tobacco plantations in Deli, East Sumatra, experienced tremendous growth between the 1870s and the 1890s. The Dutch Indies government began to standardize the official Malay language in the 1890s through state regulation of Malay grammar and spelling. Then, at the start of the 20th century, the domain from "Sabang to Merauke," which the Indonesian Republic eventually inherited as its territory, was fixed, and modern state institutions were created within those borders. For instance, a modern police force was created in the 1910s, and a political-police apparatus in 1919. Also, education in the Dutch and Malay languages was gradually expanded in the name of "progress." In this way, a world that struck contemporary Japanese who visited the Dutch Indies as more modern than Japan appeared in Java in the 1910s.

The Dutch Indies, however, was a colonial state, not a nation-state. Consequently, industrialization meant the formation of a primary-export economy, not the development of manufacturing sectors. Also the creation and expansion of state institutions, beginning with the modernization of the police, were designed to strengthen colonial rule. Indeed, the very concept of nationality was impossible in a colony. One need only look at the expansion of education during the age of the "Ethical Policy" in the early 20th century. Education was intended to cultivate talent for colonial rule and the colonial economy; it was not designed as "national" education. Hence the educational system was divided into four tracks: primary and secondary education in Dutch for Dutch children linked to the edu-

cation system in the Netherlands; primary education in Malay for native children; primary and secondary education in Dutch for upper-class native children; and primary and secondary education in Malay for "foreign orientals," namely, Chinese. What this education produced was a plural society based on race, not national society.

Colonial modernization took this form in Indonesia because the Dutch East Indies state, like Japan, succeeded in enclosing the Dutch Indies territory, while accepting British hegemony in maritime Asia. The circumstances in the Philippines and Siam were a bit different. In the 19th century, the Philippines lay under Spanish colonial rule. Spanish capitalism, however, was very weak, and the power of the Spanish colonial government in Manila had not penetrated very deeply into outlying areas. As a result, unlike the Dutch Indies state, the colonial government in the Philippines was unable to function as the gate keeper for the colony. Still, without economic development, the Philippines would have had no economic merit as a colony. And so, the colonial government, beginning in the mid-19th century, opened ports in Manila, Cebu, and Iloilo for international commerce, as a result of which the Philippines became integrated economically into British-dominated maritime Asia, and the local economies became "industrialized" through direct ties with Singapore and Hong Kong.

Consequently, Chinese mestizos and the commercial network formed by overseas Chinese played an important part in the 19th century economic development of the Philippines. During the very same period when the native elite in the Dutch Indies was transformed from aristocrats to bureaucrats in tandem with the formation of a modern bureaucratic state, in the Philippines Chinese mestizos and prominent native gradually developed into landed elite. As one might expect, the education demanded by this elite was not the kind designed to produce native civil servants, but rather higher education in Spanish that befitted a gentleman. *Ilustrados*, the Philippine elite who received a Western education, emerged at a time when these changes were taking place. Under American colonial rule in the 20th century, they also obtained political power through the parliamentary system introduced by the United States.

What about Siam? While formally preserving its political independence, Siam was integrated economically into maritime Asia under British hegemony through its rice exports to British-controlled Malaya. A more important element in Siam's modernization, however, was the fact that British Malaya served as the model for the modernization drive launched during the reigns of Rama IV and Rama V. Thus in Thailand in the second half of the 19th century, as in British Malaya, opium and other revenue farms run by Chinese formed the

foundation of the state's finance. Government officials sent out directly from Bangkok gradually assumed control of local administration, and a Western education system whose chief goal was to produce civil servants was established. For that reason, the modernization of Siam in the second half of the 19th century and early 20th century is sometimes referred to as "internal colonization."

The Modern World in Southeast Asia

Thus modernization in Japan and Southeast Asia took very different forms. If Japan underwent imperialist modernization, then Southeast Asia entered the modern era through colonial modernization. Accordingly, it is hardly surprising that the modern era looked different in Southeast Asia, or that Southeast Asians responded differently, to the coming of the modern world in the region.

How, then, did Southeast Asians, respond to the modern era? Most crucial, perhaps, was the rise of nationalism. As Benedict Anderson observes in *Imagined Communities* nationalism in a movement whereby the inhabitants of a territory defined by clearly fixed boundaries imagine themselves as a nation and seek to found their own nation-state as an organ for governing that nation.³ In Japan, the nation was created from above as a prerequisite for building a modern state. But in Southeast Asia, which experienced colonial modernization, nationalism emerged mainly from below, as popular nationalism, that is, as a movement to gain freedom from colonial rule and build an independent nation-state.

Since the rise of nationalism in Southeast Asia is persuasively analysed by Anderson, I will simply note here the crucial importance of the spread of Western education and the establishment of centralized modern state institutions. What I wish to stress is the importance of the rise of nationalism in the modern era in Southeast Asia. To understand this, one need only consider when and how modern politics began in that region, that is to say, politics that we can readily recognize as such today.

In Indonesia, for instance, it was around the turn of the century that newspapers and magazines began to be published in Malay, providing inhabitants of the colony with a venue for expressing to the government their wishes, criticism, and protests. Meetings, boycotts, and the distribution of propaganda leaflets began to be carried out around 1910; in the latter half of the 1910s, political parties were formed, labor and peasant unions were created, and strikes and demonstrations started to be held. Furthermore, concepts indispensable to modern political discourse — idioms such as *rakyat* (people), *bangsa* (nation), *merdeka* (free), *revolusi* (revolution), *kapitalisme* (capitalism), *sosialisme* (socialism), and *komunisme* (communism) — were coined around that time. As a result,

the Indonesian language, the political language of Indonesian nationalism, was created along with official Malay, the language of the Dutch Indies state.

Philippine nationalism developed at the end of the 19th century, a generation earlier than in Indonesia. It occurred simultaneously with the emergence of the ilustrados, represented by Jose Rizal. Thai nationalism developed a generation later than in Indonesia, beginning in the days of Pridi Phanomyong and Phibun Songkram, who overthrew the Chakri absolutist monarchy in the Constitutional Revolution in 1932. However, the importance of nationalism in Southeast Asia (in fact, throughout the world) lay in its broad revolutionary significance on a social and cultural level beyond the political realm. A few examples will make this clear.

First of all, there was a change in the meaning of religious salvation. In Burma, for instance, U Ottama preached that the only way for Buddhist believers in colonies under British rule to reach nirvana was to liberate Burma and establish Buddhist socialism. In Indonesia, the Islam reformist leader Haji Misbach called for the creation of Islamic communism. He argued that the daily struggle against the temptations of Satan and proving one's faith were the true way of Muslims, that the temptation of Satan currently manifested itself in the form of the spirit of capitalism, and therefore that fighting capitalism and endeavoring to construct a communist society were the task of true Muslims. This politicization of religion occurred because the colonial government, as a secular state, did not protect religion as a patron, as traditional kings in the past had done, and because the spread of Western-style education threatened the social basis of traditional religious education. Even so, however, this phenomenon clearly would not have developed without the concepts of nation, revolution, independence, socialism, and communism. As a result, religious martyrdom was transformed into political martyrdom for one's country.

Secondly, a new historical imagination developed. When people begin to imagine themselves as a nation, the past takes on new historical meaning as that nation's past. When a new concept of empty, uniform, linear time replaces cyclical time (e.g., the Javanese age of light and age of darkness), and time no longer has any significance in itself, history is envisioned as nothing more or less than the history of the nation itself from the past to the future. From this new national perspective, Tjut Nja Din, the heroine of the Aceh War at the end of the 19th century, and Diponegoro, who had advocated the conquest of Java earlier in that century, both became Indonesian national heroes. The kingdom of Sriwijaya, which had formerly claimed hegemony in the Malay world, became part of the Indonesian national tradition, along with the Javanese kingdom of Mataram. King Ramakhamhaeng, the founder of

Sukhotai in the 13th century, became the founder of the Thai nation-state, and the Cakri dynasty became part of the Thai national tradition, along with Buddhism. These developments were the product of a new historical imagination. The legitimacy of the nation-states today is founded upon that vision of national history.

Third, a new spatial and geographical vision developed. While discussing the two maps at the beginning of this essay, I noted that Southeast Asians in the late 18th century did not imagine their world in the way it was represented in these maps. I will not dwell here upon how people at the time imagined and represented their world. What I wish to point out is that the map that we know today came into being by the end of the 19th century as a result of advances in cartography, and that it was hung in government offices and classrooms and printed in textbooks. Thus in the 20th century, Southeast Asians came to envision their country as a logo clearly demarcated by national boundaries, just as the Japanese, when they hear the word "Japan," imagine the Japanese archipelago, depicted in red unlike the rest of the map.

It is often said that nations are based as much on collective amnesia as on collective memory. Today, realization of what we have lost as a result of gaining a national vision has led to criticism of the modern era, and the faith in historical progress that sustained it has lost much of its appeal. Around the turn of the century, however, when the modern age came to Southeast Asia amid colonial modernization, people held high hopes of "progress." Sukarno called Indonesian independence a "golden bridge" leading to the bright future. As his remarks suggest, the arrival of nationalism was taken as a sign that people had awakened as a nation and were starting to follow the path of progress. The reason for this optimism is that, even if the modern era eventually brought its own darkness, at the beginning it was perceived as something that would liberate human beings from oppression and injustice, from irrationality and exploitation.

In the 1910s, Mas Marco, a "native" journalist who lived in Java under Dutch rule, wrote the following criticism of Dr. Rinkes, an adviser for native affairs to the governor general.

"A person such as Padoeka Dr. Rinkes, the adviser for native affairs, who has been entrusted by the Administration with matters concerning the situation of the Natives certainly:

1. understands better than anyone else the good or bad lot of us Natives;
2. more than anyone else loves us Natives;
3. has more adequate knowledge about anything whatsoever than us Natives.

But how about Marco? What sort of person is he? Marco is person from the little-man-class; he has never stepped through a school door; his views are not broad; etc. Nonethe-

less, by the ordaining of the one God, Marco has been given two ears, two hands, one head, one mouth, etc. — just like most people.

Marco's two eyes are no different from the two eyes of a graduate from a Universiteit (college). Thus if Marco sees something white, certainly that something also appears white to the eyes of the educated. And so on."⁴

This sort of writing was composed by Southeast Asians after the modern era began, or perhaps it would be better to say that the modern era began when they began to write like this. A new history, politics, and literature emerged from this new attitude toward the world in which they lived. What gave birth to it was a new spirit equating religious and patriotic martyrdom, and a new historical, geographical, and national imagination.

(Translated by Janet Goff)

Notes

1. David Joel Steinberg, ed., *In Search of Southeast Asia: A Modern History* (Honolulu: University of Hawaii Press, 1987).
2. See Hamashita Takeshi, *Kindai Chugoku no Kokusai-teki Keiki—Choko Boeki Shisutemu to Kindai Ajia* [Modern China's International Hour: The Tribute System and Modern Asia], Tokyo Daigaku Shuppankai, 1990; "Jo — Chiiki Kenkyu to Ajia" [Introduction: Regional Studies and Asia], in Mizoguchi Yuzo et al eds., *Chiiki Shisutemu* [Regional Systems], vol. 2 of *Ajia karakangaeru* [Views from Asia], (Tokyo Daigaku Shuppankai, 1993); and "The Intra-Regional System in East Asia in Modern Times," in Peter J. Katzenstein and Takashi Shiraishi, eds., *Between Worlds: Japan in Asia* (Ithaca: Cornell University Press, forthcoming).
3. Benedict Anderson, *Imagined Communities: Reflections on the Origin and Spread of Nationalism*, rev. ed. (London: Verso, 1991).
4. Takashi Shiraishi, *An Age in Motion: Popular Radicalism in Java 1912-1926* (Ithaca: Cornell University Press, 1990), p. 83.